

## 子どもたちの 笑顔輝く社会へ



### 大好きな子どもたちと共に

「高校3年生の夏休みに保育園で働いていた母の手伝いに行く機会があったんです。そこで子どもたちの可愛さ、素晴らしさに魅了され、保育士になろうと思いました。保育一筋に生きてきて40年余り。とにかく子どもが大好きで根っからの保育好き。保育を語るとは最高の幸せを感じる時間です。」と、笑顔で語るのは、清華こども園長の蒲池房子さんです。昨年までは長崎の活水女子大学、その前は長崎玉成短期大学の講師として約16年間、保育者を育てる仕事にも携わりました。

「園では子どもたちのエピソードには事欠きません。毎日がドラマです。幼い子どもたちですがそれぞれに考えがあって、その言葉や行動にはすべて意味があります。背景には家庭があり、地域があり、人との関わりがあります。異年齢の子ども、保護者、保育者みんなが「育ち合っている」ということを感じます。我々も子どもたちから学ぶことがたくさんあるんですよ。」と、語ります。

田植え前の田んぼで全身泥んこになって遊ぶ「泥リンピック」は、20年以上続く園の恒例行事です。楽しい中にもこういう体験を通じて「ここが自分が生まれ育ったふるさとなんだよ」と、土の感触と共に、心の原風景として記憶に残し